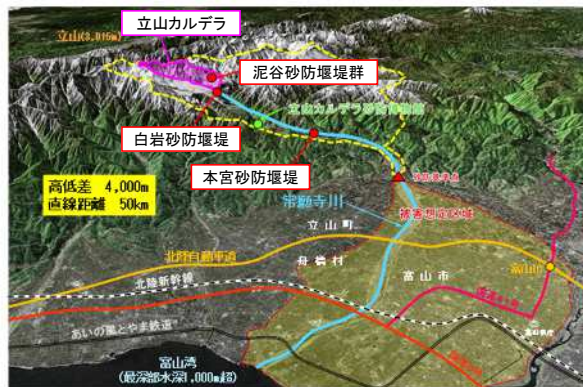


立山砂防の世界文化遺産登録に向けた取り組み

富山県の立山には、国指定重要文化財「常願寺川砂防施設」をはじめ厳しい自然環境の中で下流の住民を災害から守り続けてきた学術的に価値の高い近代砂防施設群が存在します。富山県では、防災遺産として砂防施設群の価値に着目し、世界文化遺産登録を目指して様々な活動を展開しています。

位置図



1858年 飛越地震による約4億m³ともいわれる山体崩壊

立山カルデラ
東西6.5km、南北4.5km
推定2億m³の不安定土砂

これまでの取り組み内容

立山砂防の歴史的・文化的価値の検証、国際的な認知度の啓発活動

海外の砂防関係者や国内外の有識者を招き、フォーラムやシンポジウムを開催

- 国際砂防フォーラム2009～2011
- 世界遺産フォーラム・セミナー2012～2014
- 世界遺産登録推進シンポジウム2015～
- 国際防災学会インタープリメント2018(富山)

インタープリメント2018富山宣言(抜粋)

立山砂防は顕著な普遍的価値を有し、人類共通の遺産として共有すべき

- ① 災害が多い日本で生まれた防災の総合技術
- ② 最も厳しい自然環境のもと、総合的な水系管理技術の近代における1つの到達点
- ③ 世界中の中山間地に適用し得る普遍性のある防災技術

国重要文化財「常願寺川砂防施設」に指定(2017.11.28)

2009年に指定済みの白岩堰堤に本宮堰堤と泥谷堰堤を追加指定

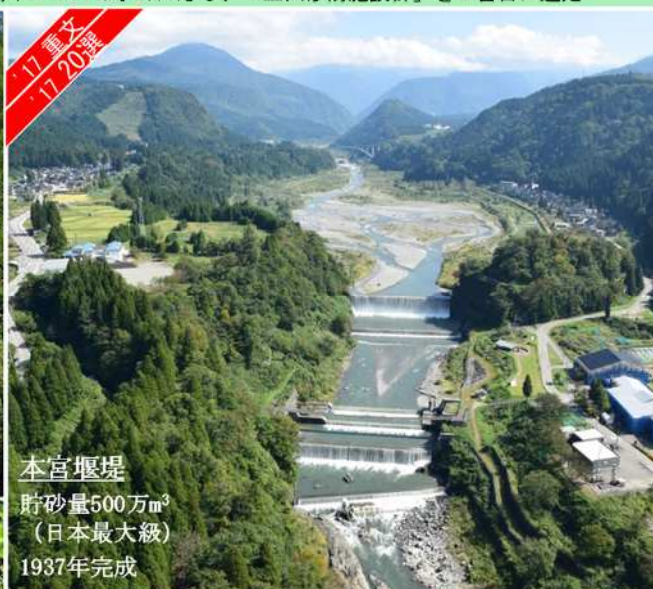
日本イコモス国内委員会「日本の20世紀遺産20選」に選定(2017.12.8)

ユネスコ世界文化遺産登録に関する諮問機関イコモスの求めに応じ、「立山砂防施設群」を3番目に選定



白岩堰堤

本堰堤の高さ63m
(日本一)
総落差108m
1939年完成



本宮堰堤

貯砂量500万m³
(日本最大級)
1937年完成



泥谷堰堤

緑を創出
22基の堰堤群
1938年完成

明治・大正期に整備された県営砂防施設の調査研究

現存する砂防堰堤の大半は、堆砂域に多量の土砂を捕捉したままの状態で竣工当時の場所に存在

⇒ 直轄事業以前に、より崩壊地に近く、全国屈指の厳しい環境で実施された県営砂防事業※が、今なお富山平野の保全に寄与 ※ 明治39年～大正15年



現存する砂防堰堤(西ノ谷)

ユースプログラム、体験学習会の実施

小学生から大学生等の幅広い年代に向けた講座や現地見学を実施